

言葉の力

2023. 12. 5

リーダーや経営者は、言葉に力がなければならない。もし、リーダーや経営者の語る言葉に力がなければ、部下や社員は、従おうという気持ちにならない。ついていこうという気持ちにならない。では、どうすれば、リーダーや経営者は、言葉の力を身につけることができるのか。

各種諸々の会にいくと、必ずあいさつがある。自分が、その任を負うこともある。私の場合だが、そのあいさつから何かを学ぼうと、ペンをもちながら聞いていることが多い。大事だと思ったフレーズをメモするのである。メモするときもあれば、しないまま終わることもある。

まわりを見る。誰もメモしようとはしていない。聞いているだけである。姿勢よく、行儀よく耳を傾けている。果たして、聴いているのだろうか。そのあいさつは、人の心に残るのだろうか。多くの場合、あいさつの内容、意味は伝わってくる。だが、言葉の響きとしては伝わってこない。言葉が、心に響いてこない。せっかくよい言葉を発しているにもかかわらず、まるで作文を読んでいるような気の抜けた言葉が、耳を素通りしていく。そんなことはないだろうか。私のあいさつもそうであろう。

あいさつがうまい人はいる。流暢に、ウイットに富んで、場を和ませるような話をする人がいる。アメリカをはじめ海外には、日本人と比べると、実に気の利いたあいさつ、いやスピーチをする人が多い。あれは、なぜだろうか。

体育館で全校生徒を前にして話すとき、職員室で先生方を前にして話すとき、あいさつと同じようなことが起きていないだろうか。なぜ、言葉に力がないのだろうか。その力とは何か。それは信ずる力ではないか。自分の語っていることを、本当に深く信じているか。そのことが問われている。だから、社交辞令やきれいごとが入りがちなあいさつには力が伴わない。

そう考えると、職員室での先生方への話よりは、体育館での生徒に向けた話の方が力がありそうである。全員の生徒の視線が、壇上の私に向けられている。まちがいなく聞いている。生徒は、心の中でこう思いながら聞いている。「校長先生は、本気かな」もし、そのとき、校長が、自分の語ったことを信じていないならば、そこで語られた言葉の意味が、どれほど立派なものであっても、その言葉の響きは軽いものになってしまう。だから、自分が本当に信じていることを語らなければならない。そうでなければ、校長の語る言葉は、決して生徒の心に響くことはない。理屈はいらない。校長が、そのことを深く信じ、魂で、その一言を言えるかどうか、それが問われている。

言葉の力というものは、すばらしい。たった一つの言葉で、全員の士気が、どこまでも高まる瞬間がある。スポーツによく見られることである。しかし、逆に、たった一つの言葉で、全員の気持ちが恐ろしいほどに萎える瞬間もある。だから、リーダーには信ずる力が問われている。リーダーの言葉が、人を動かす。